

角野康郎<sup>a,\*</sup>, 田中純子<sup>b</sup>: シャクジイタヌキモ (タヌキモ科) の再検討<sup>a</sup>神戸大学大学院理学研究科生物学専攻<sup>b</sup>練馬区立牧野記念庭園記念館Yasuro KADONO<sup>a,\*</sup> and Junko TANAKA<sup>b</sup>: Identity of *Utricularia siakujiiensis* (*Lentibulariaceae*)<sup>a</sup>Department of Biology, Graduate School of Science, Kobe University, 1-1, Rokkodai-cho, Nada, Kobe, 657-8501 JAPAN;<sup>b</sup>Makino Memorial Garden & Museum, 6-34-4, Higashi-ohizumi, Nerima-ku, Tokyo, 178-0063 JAPAN

\*Corresponding author: kadono@kobe-u.ac.jp

Summary: *Utricularia siakujiiensis* S. Nakaj. (*Lentibulariaceae*) was described from Sanpouji-ike Pond, Shakujii, Tokyo, Japan, in 1937 as a new species. Its identity was studied based on its original description and the examination of herbarium specimens collected from the type locality. Based on the morphology of flowers, fruits and turions, the plant was identified as *U. macrorhiza* Le Conte distributed in northern Japan. It was a relict population of *U. macrorhiza* which had survived in spring-fed cool water in the Tokyo area. Because the original specimen of *U. siakujiiensis* is not located, the figure (Pl. 2) in the protologue is designated as the lectotype of the species.

シャクジイタヌキモ *Utricularia siakujiiensis* S. Nakaj. (タヌキモ科) は、東京都板橋区 (当時; 分区により現在は練馬区) 石神井三宝寺池に産するタヌキモ類似の植物を中島定雄がタヌキモ属の新種として報告したものである (東京府土木部 1937)。本種は戦後、三宝寺池から消滅したが (大滝 1974, 大滝・石戸 1980), 記載に引用された標本 (S. Nakajima, Sept. 2, 1935) の所在は不明であり, その正体について十分な検討が進んでいなかった。後述するように, シャクジイタヌキモをイヌタヌキモ *U. australis* R. Br. のシノニムとする見解があるが (小宮 2014), 筆者らは中島の原記載と国立科学博物館に所蔵されている「シャクジイタヌキモ」とされる標本を再検討した結果, 本種はオオタヌキモ *Utricularia macrorhiza* Le Conte であるとの結論にいたったので報告する。

中島の記載 (東京府土木部 1937) に基づき,

原 (1949), 大井 (1953), 田村 (1953, 1981), 奥山 (1962) は, シャクジイタヌキモを独立種として取り上げた。しかし, 日本産タヌキモ科の分類学的研究で学位論文をまとめた小宮定志は, シャクジイタヌキモを「タヌキモ *Utricularia vulgaris* L.」のシノニムとした (Komiya 1972)。その後, Komiya and Shibata (1980) は, イヌタヌキモを含めて「タヌキモ *U. australis* R. Br.」とした上で, シャクジイタヌキモをそのシノニムとしている。世界のタヌキモ属のモノグラフをまとめた Taylor (1989) と *Flora of Japan* でタヌキモ科を担当した Kadono (1993) も, シャクジイタヌキモを *U. australis* のシノニムとして取り扱っている。これは Komiya and Shibata (1980) の見解を踏襲したものである。

新種記載の基準となった中島の標本の所在が不明であることは先述の通りであるが, 石神井三宝寺池で採集された 2 点の標本が国立科学博物館に所蔵されている (三宅 徹 1932 年 8 月 13 日, 奥山春季 1934 年 8 月 1 日採集)。標本のラベルにはいずれも「シャクジイタヌキモ」という種名が記され, これは奥山春季の筆跡とされる (小宮 2014)。この 2 点の標本の写真を新たに検討した上で, 小宮 (2014) は「いずれもイヌタヌキモであると同定できた」とし, シャクジイタヌキモがイヌタヌキモのシノニムであるという見解をあらためて述べている。

日本のタヌキモ類似植物については, 近年, 新たな研究の展開があった。北日本に産する大形の「タヌキモ」が *U. macrorhiza* Le Conte として報告され, 和名はオオタヌキモとされた (小宮ほ

国立科学博物館所蔵の2点の標本には花がついている (Fig. 2). 距が下唇より長く突出する特徴は、この標本がオオタヌキモであることを示している. 小宮 (2014) がこれらの標本をイヌタヌキモと同定した根拠は示されていないが、花の距が下唇より長いシャクジイタヌキモに対しイヌタヌキモの距は下唇より短いことは、大井 (1953) の検索表にも明記されている.

オオタヌキモは北海道と東北地方の一部に分布する北方系の種 (小宮ほか 2001) である. 三宝寺池は武蔵野台地の地下水に涵養される「武蔵野三大湧水池」のひとつであり、かつてはミツガシワも生育していた (大滝 1974). そのような冷水環境で関東地方に遺存的に生育していたオオタヌキモが、シャクジイタヌキモの正体である.

オオタヌキモの分類を再整理すると以下のようになる.

*Utricularia macrorhiza* Le Conte in Ann. Lyc. New York **1**: 73 (1824); Taylor in Kew Bull. Add. Ser. **14**: 594 (1989); Komiyama & al. in Bull. Nippon Dental Univ. no. 26: 169 (1997) & J. Jpn. Bot. **76**: 120 (2001); Kadono, Field Guide Aquat. Pl. Jap.: 287 (2014).

*Utricularia siakujiiensis* S. Nakaj. [in Tokyo Ryokuti-Keikaku Chosa-Iho **9**: 90, pl. 2 (1937), cum. descr. jap.] in H. Hara, Enum. Sperm. Jap. **1**: 293 (1949); Tamura in Acta Phytotax. Geobot. **15**: 32 (1953); Ohwi, Fl. Jap.: 1070 (1953).

**Lectotype** (designated here): Plate 2 in Tokyo Ryokuti-Keikaku Chosa-Iho 9 (1937) (Fig. 1)

*Utricularia vulgaris* L. var. *japonica* auct. non (Makino) Tamura: Kitam. & Murata, Col. Illust. Herb. Pl. Jap. **1**: 123 (1957), p.p.; Kadono, Aquat. Pl. Jap. 149 (1994), p.p.

*Utricularia vulgaris* auct. non L.: Komiyama, Syst. Stud. *Lentibulariac.*: 83 (1972), p.p.

*Utricularia australis* auct. non R. Br.: Komiyama & C. Shibata in Bull. Nippon Dental Univ., Gen. Edu. **9**: 201 (1980), p.p.; Kadono, Fl. Jap. **IIIa**: 403 (1993), p.p.

Nom. Jap: Ô-tanukimo.

今回の検討にあたり、国立科学博物館所蔵標本の閲覧では門田裕一博士にお世話になりました.

また首都大学東京牧野標本館の菅原 敬博士、高知県立牧野植物園 (当時) の田中伸幸博士、東京大学大学院理学系研究科附属植物園の東馬哲雄博士からはシャクジイタヌキモの標本について情報を提供いただきました。皆様方に心より感謝申し上げます。

## 要 旨

東京都石神井三宝寺池から中島貞雄によって新種として記載されたシャクジイタヌキモの分類学的再検討を行った。原記載と国立科学博物館に所蔵されている2点の標本から、本種の花の距は下唇よりも長く突出し、越冬芽と果実は球形である。これらの特徴から、この植物はイヌタヌキモでもタヌキモでもなく、オオタヌキモと同定した。北日本に分布するオオタヌキモが、湧水のある三宝寺池の低温環境で遺存的に生き残っていたのがシャクジイタヌキモであると考えられる。

## 引用文献

- 原 寛 1948. 日本種子植物集覧 第一冊. 岩波書店, 東京.
- Kadono Y. 1993. *Lentibulariaceae*. Iwatsuki K., Yamazaki T., Boufford D. E. and Ohba H. (eds.), Flora of Japan **IIIa**: 400–404. Kodansha, Tokyo.
- 角野康郎 1994. 日本水草図鑑. 文一総合出版, 東京.
- 角野康郎 2014. ネイチャーガイド 日本の水草. 文一総合出版, 東京.
- Kameyama Y. Toyama M. and Ohara M. 2005. Hybrid origins and F<sub>1</sub> dominance in the free-floating sterile bladderwort, *Utricularia australis* f. *australis* (*Lentibulariaceae*). Amer. J. Bot. **92**: 469–476.
- Komiyama S. 1972. Systematic Studies on the *Lentibulariaceae*. Department of Biology, Nippon Dental College, Tokyo.
- 小宮定志 2014. シャクジイタヌキモの顛末記. 食虫植物研究会々誌 **65**: 33–37.
- Komiyama S. and Shibata C. 1980. Distribution of *Lentibulariaceae*. Bull. Nippon Dental Univ., Gen. Edu. **9**: 163–212.
- 小宮定志, 外山雅寛, 沖田貞敏, 柴田千晶 2001. 北日本に分布するオオタヌキモ. 植物研究雑誌 **76**: 120–122.
- Makino T. 1914. Observations on the flora of Japan. Bot. Mag. (Tokyo) **28**: 20–30.
- Miki S. 1935. New water plants in Asia Orientalis III. Bot. Mag. (Tokyo) **49**: 847–852.
- 大井次三郎 1953. 日本植物誌. 至文堂, 東京.
- 沖田貞敏 2006. 秋田県のタヌキモ類について. 秋田自然史研究 **50**: 2–7.
- 沖田貞敏 2008. 秋田県産大型タヌキモ類3種の花茎断面